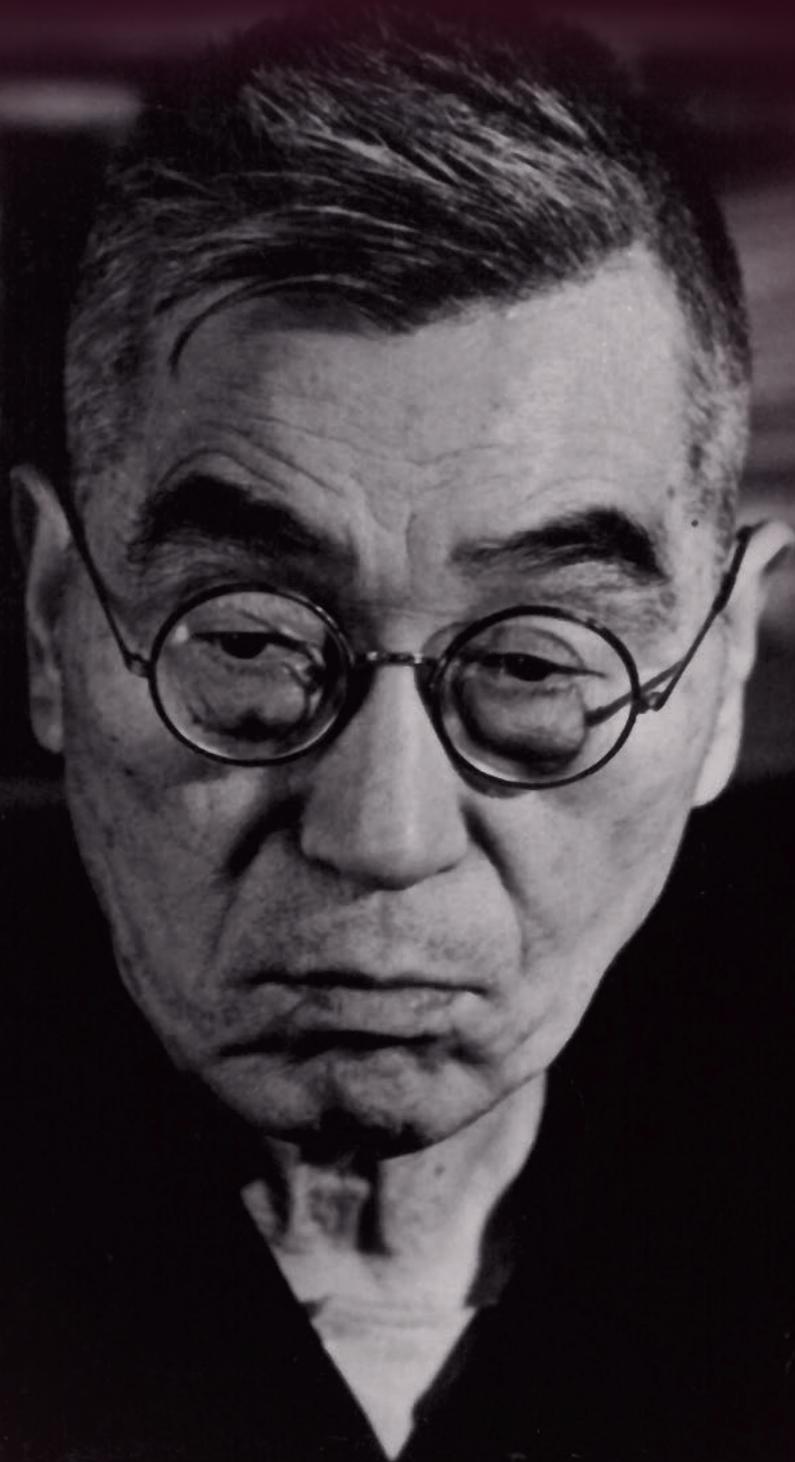


會津八一記念館50年の歩み



50th
1975-2025

館 博 入 一 記 念 館 50 年 の 歩 み



開館 50 周年を迎えて

新潟市會津八一記念館

館長 野中 浩俊



短歌・書・東洋美術史に優れた業績を遺し「最後の文人」と称される秋艸道人會津八一。その生涯を顕彰し、永く後世に伝えることを目的とする当館は、1975（昭和 50）年の開館以来、今年で 50 周年を迎えました。

1956（昭和 31）年 11 月 21 日、會津八一没して後、八一の作品や遺品を保存・公開する記念館設立を望む声が高まり、養女蘭をはじめ新潟日報社長小柳胖・マサ夫妻、心友中田瑞穂、その他早稲田大学関係者等、八一を敬慕する人々が奔走し、遺作の蒐集・遺品の整理に努め、新潟県や新潟市その他、企業や団体・有志の方々のご協力を得て、念願の會津八一記念館開館が実現致しました。

開館以来、当館では主要な活動として年に 4、5 回の展覧会を開催、中でも年 1 回の特別展では八一の作品を中心に八一有縁の人々や文人・芸術家、さらには大和の古寺・古仏等、八一の学芸の基礎を築いた事柄をテーマにそれぞれの年代や分野に光を当てながら彼の生涯を展示顕彰してまいりました。

とりわけ 2010（平成 22）年の「平城遷都 1300 年記念・奈良の古寺と仏像～會津八一のうたにのせて～」展は盛況を博しました。新潟県立近代美術館をメイン会場に開催したこの仏像展は全国的にも大きな反響を呼び、当館の貢献が評価され、新潟日報文化賞を受賞。さらにこれを契機に、12 年 2 月には新潟市と奈良県による歴史・文化交流協定が締結されるという誠に意義深い企画となりました。

ところで、これらの展覧会とは別に、母校早稲田大学の會津八一記念博物館との交流協定締結や学術論文の公募、書の国際シンポジウム、写真コンテスト開催などの関連事業も記憶に残る事柄です。

また、普及活動として各種行事と並行し、逐次その分野の著名人を招聘して講演会を開催、加えて『秋艸道人・會津八一墨蹟』（二玄社刊）をはじめとする作品集や評伝等、関連書籍を多数出版するなど、広く八一の学芸への理解を図ってまいりました。

その他、法隆寺や興福寺・中宮寺・薬師寺・東寺など、奈良や京都の名だたる古刹をはじめ、地元新潟日報本社前にも八一の歌碑を建立し、社会への八一アピールに努め、その都度大きな話題となりました。

2019（令和元）年 9 月、天皇・皇后両陛下のご来館は、社会における当館の役割の大きさを示すものとして、改めてその責任の重さを痛感致しました。

このように多くの皆様のご支援により、新潟の海浜、西船見町に財団法人として開館した当館はその後、新潟市の施設へ移行、新潟日報メディアシップ移転を経て事業もますます拡大し今日に至っております。

今後も偉大な「文人」會津八一の魅力をあらゆる角度からご覧いただけるよう館員一同鋭意取り組んでまいります。

最後になりましたが、半世紀ににわたりさまざまな活動にご支援・ご尽力いただきました関係諸機関並びに関係各位に心より感謝申し上げます、今後とも変わらぬご支援をお願いし、ご挨拶といたします。

會津八一記念館開館 50 周年に寄せて

新潟市長 中原 八一

新潟市會津八一記念館開館 50 周年を、心からお祝い申し上げます。

歌人・書家であるとともに、美術史研究など様々な分野で活躍し、「最後の文人」とも呼ばれる會津八一は、新潟市（現中央区）古町で生まれました。早稲田大学を卒業後は英語教師として教鞭をとるなど教育者としても知られ、晩年は夕刊新潟社社長を務めたほか、新潟市で精力的に書や短歌の制作活動に励み、多くの作品を残しています。また、新聞や講演、展覧会などを通じて、郷土新潟の文化振興に力を尽くしたことから、昭和 26 年に新潟市で初めての名誉市民に選ばれました。

こうした功績を広く伝えるため、昭和 50 年 4 月、現在の新潟市中央区西船見町の海岸に近い松林に囲まれた一角に、會津八一記念館が開館しました。會津八一記念館は平成 26 年 8 月に新潟市中央区万代の新潟日報メディアシップ内に移転したあとも、一貫して會津八一の魅力を私たちに伝え続け、今年で 50 周年を迎えました。施設の管理運営を行う公益財団法人會津八一記念館におかれましては、企画展覧会や講演会、写真コンテストなどのイベントを通じて、會津八一の生涯と業績を多角的に顕彰いただいています。この場をお借りして公益財団法人會津八一記念館の皆様のご尽力に厚く感謝申し上げます。

私たちは、會津八一の揮毫を「新潟日報の題字」や「大阪屋の看板」などで普段から目にしています。また、新潟市長室には、市政に携わるものの姿勢として「聴無聲」（声無き声を聴く）の額が掛けられています。會津八一記念館にぜひ多くの方からご来館いただき、會津八一の芸術をより親しんでいただくとともに、その功績がより広く伝わるよう祈念し、巻頭のご挨拶とします。



開館 50 周年にあたって

公益財団法人會津八一記念館

理事長 佐藤 明（新潟日報社代表取締役社長）

新潟が輩出した稀有の文人、會津八一先生の幅広い学芸活動を顕彰する會津八一記念館が 1975（昭和 50）年に開館し、今年で 50 周年を迎えられたことは、地元の皆様はもとより全国のファンから支えていただいたお陰と心から感謝申し上げます。開館前の 1970 年代前半、記念館建設を強く望んでいた先生の養女蘭さんとともに財団設立に尽力した小柳胖新潟日報社社長は先生から仲人を務めていただいた間柄であり、財団の初代理事長、館長を務めました。その後歴代社長が理事長となり、今日まで記念館の管理運営に携わってまいりました。

會津先生は東京での空襲で住居と万卷の書や資料を失いましたが、戦後、新潟日報社第 2 代社長の坂口猷吉から夕刊新潟社の社長就任を懇請され受諾。早稲田大学復帰への思いを断ち切り、新潟の文化振興に努め、歌集の編纂や書家としての創作活動にも打ち込みました。こうした活動が高く評価され、1951（同 26）年には新潟市の名誉市民第 1 号に推挙されました。本紙の題字を揮毫していただくなど、深い絆で結ばれた新潟日報社も先生を社賓にお迎えしました。

1998（平成 10）年に施設、収蔵作品をすべて新潟市に寄贈することで、さらに安定した運営が可能となった一方で、財団も公益財団法人となり、また市の指定管理者として効率的な運営と高い数値目標の実現を求められています。若い世代に會津先生存在を認識してもらい、来館を促す方策も喫緊の課題です。古き良き伝統を生かしながら、新しい時代に合った考え方を取り入れ、開館 100 年に向け、役職員一同、先生の顕彰活動に邁進してまいりますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



會津八一ってどんな人？

あ い づ や い ち

／ 會津八一とは (1881-1956)

大正から昭和にかけて歌人(短歌をよむ人)、書家(文字を書くのが上手な人)、美術史学者(美術の歴史を調べる人)、教育者(学校の先生)として幅広く活躍した学芸の人です。

学芸の人とは、学問と芸術の異なる二つの分野を極めた人のことを言います。



愛用した文房具

／ 生まれた日はいつ？

作品に押す印



「八一」という名前は、誕生日(8月1日)にちなんで名づけられています。

／ 生まれたのはどこ？

新潟市古町通5番町(今の中央区古町通)で生まれました。

がごう 雅号(ペンネームのこと)を

／ 「秋艸道人」としたのはなぜ？

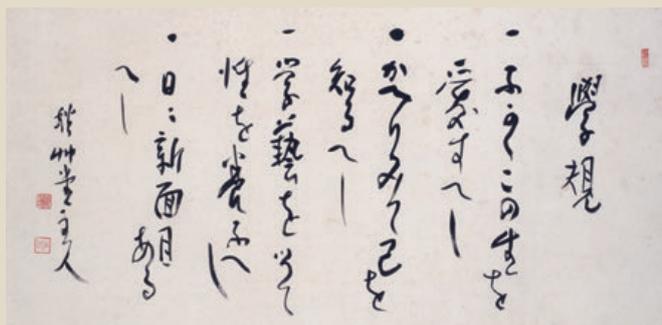
30代頃から八一は、ペンネームを「秋艸道人」としました。八一の誕生月8月は昔のこよみでは秋にあたります。「秋艸」とは秋の草(艸)のこと。八一は草花を育てるのが得意で、自宅では萩、菊、葉鶏頭などをたくさん育てていました。住まいも「秋艸堂」と名付けたほどです。「道人」とは、学問、芸術の道を探究する人という意味です。



秋艸道人

自筆のペンネーム

代表的な作品は？



学規

書作品では八一自身が生きるために掲げた4つのめあて「学規」、新聞社の題字「新潟日報」、お菓子屋さん「大阪屋」の看板の文字が多くの人に親しまれています。「学規」に書かれためあては

- ①自分の命を大切にしよう
- ②自分の考えや行動に間違いはなかったか
振り返ってみよう
- ③学問と芸術で人間性を養おう
- ④きょうよりも明日、日々向上、前進しよう

という内容です。ひとつでも自分のめあてにしてみたいかがでしょうか。

なぜひらがな書きなのか？

會津八一の短歌は、総ひらがな書きの、旧かな遣いで書かれています。八一は短歌を声に出して読んだときの音のひびきを大切にしたので、それがよくわかるようにと、一字一字が音を示すひらがなを用いたのです。しかし、ひらがな文字だけの文章は意味が取りにくいというえ、読みにくいものです。

そこで、八一は単語ごとに分ける「語分け」の形式を用いました。

■ 奈良・唐招提寺の丸柱を詠んだ短歌

(総ひらがな)

おほてらのまるきはしらのつきかげを
つちにふみつつものをこそおもへ

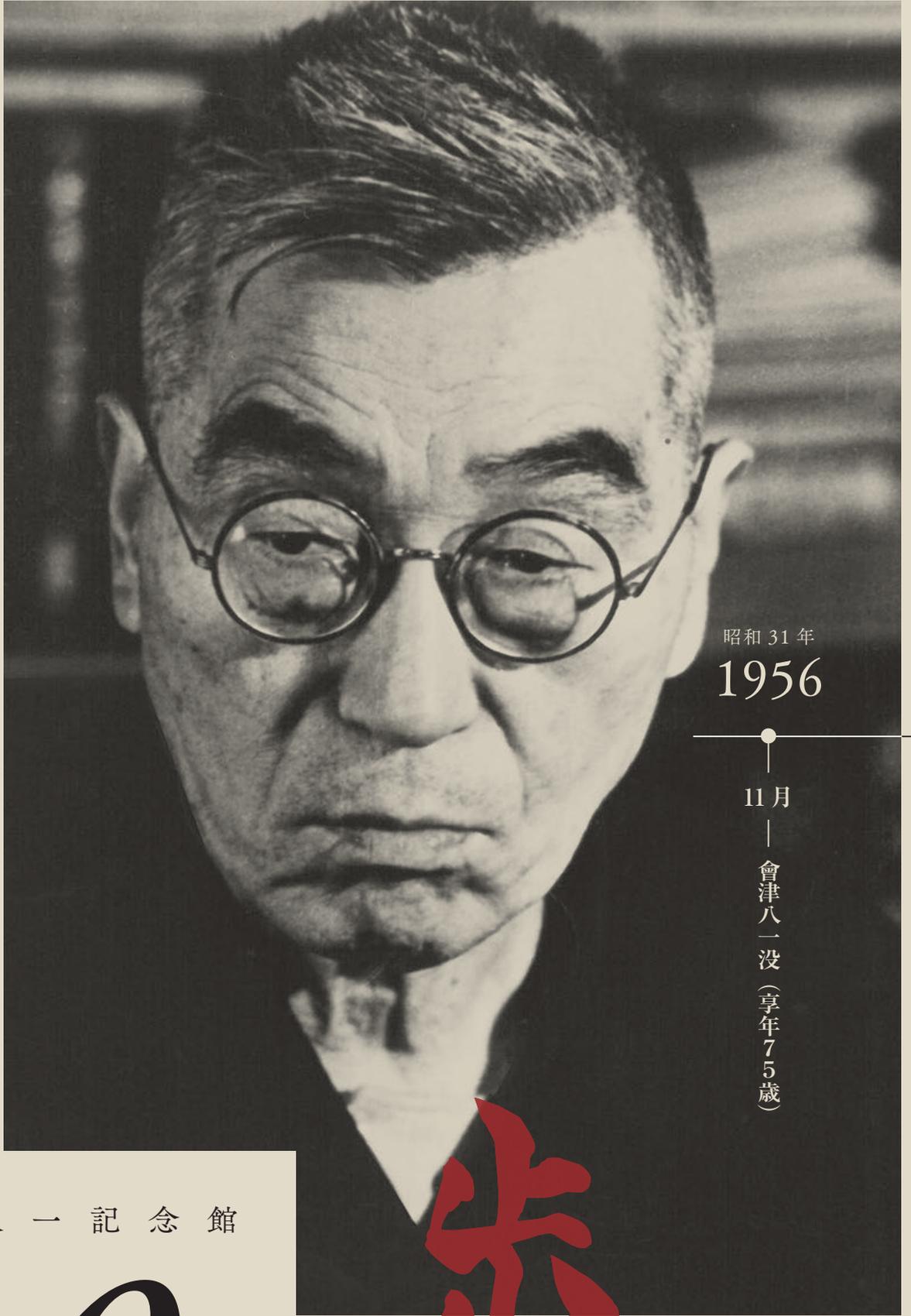
(語分け)

おほてら の まろき はしら の つきかげ を
つち に ふみ つつ もの を こそ おもへ

Index

- 04 ご挨拶
- 06 會津八一ってどんな人？
- 08 會津八一記念館 50年の歩み
 - 09 開館までの経緯
 - 10 財団の運営軌道に
 - 15 新潟市施設へ移行
 - 22 メディアシップ移転
- 26 皇室の皆様もご来館
- 27 秋艸道人賞 写真コンテスト
- 28 普及活動
- 29 出版物&グッズ

- ・本誌は財団法人設立の1972(昭和47)年度から2024(令和6)年度までの53年分の財団法人および公益財団法人會津八一記念館の理事会、評議員会に提出された事業報告書を根拠に制作した。その他、新聞あるいは館報、機関誌「秋艸」、記念館の出版・発行物に掲載された記事、広告も参考とした。
- ・本文中に掲載した写真は特に注釈がない限り、新潟日报社からの提供写真である。一部に当記念館が撮影した写真も含まれている。



昭和 31 年
1956

11 月
— 會津八一没 (享年 75 歳)

H I S T O R Y O F
T H E A R I Z U Y A I C H I
M E M O R I A L M U S E U M

會 津 八 一 記 念 館

50 年の歩み



養女 會津 蘭

會津八一は戦後、新潟日報社社長の坂口献吉氏に懇請されて夕刊新潟社の社長に就任した。その後新潟日報社社賓、新潟市名誉市民となり、作品制作に意欲を燃やす傍らで、郷土新潟の文化啓蒙活動にも力を尽くした。そして 1956 (昭和 31) 年、八一は 75 年の生涯を閉じた。

八一の没後、遺墨、遺品を引き継いだ養女の蘭 (八一の母方のいとこの娘) は、生前の八一から「おれが死んでもこの書売れば一生楽に暮らせる」と言われていたが、貴重な作品・資料の散逸を避け、その保存と公開に努めた。そしてこれらを展示・顕彰する記念館建設が悲願となった。1970 年代初め、蘭は八一が仲人を務めるなど懇意にしていた当時の新潟日報社社長・小柳胖氏や、八一の主治医で、書画の合作も多い中田瑞穂氏 (号：みづほ) らと記念館建設に向けた協議を精力的に進めたが、71 年 12 月、志半ばで世を去った。遺品の後継者となった蘭の実母・中山イツ氏は遺品の管理を目的とする

公益法人が設立された場合にはその法人に遺品を寄付したいと申し出た。これを受け小柳、中田に中山も加わり、地元企業、早稲田大学時代の八一の教え子らも賛同し、72 年 4 月に記念館建設のための財団法人設立発起人会議を開催した。小柳氏を代表とする発起人には芸術作品を収集するなど文化への造詣が深い企業経営者・敦井栄吉氏、早稲田の門人・宮川寅雄氏、中山氏、中田氏が名を連ねた。5 月には県から「財団法人會津八一記念館」の設立が許可され、登記も完了した。発起人の 5 人はそのまま財団理事となり、理事長に小柳氏を選出した。監事には第四銀行頭取の龜澤善次郎氏と新潟放送社長の清水誠一氏が就任した。

11 月には財団設立後、初めての展览会となる「會津八一展」を新潟日报社との共催で開催、遺墨などの作品を展観し、盛況だった。中山氏はこの年に八一の遺品約 60 点を財団に寄贈。財団は作品を BSN 美術館で保管、維持する万全の措置を講じ、寄贈作品の著作権は中山氏に帰属することとした。

養女蘭悲願の 記念館建設

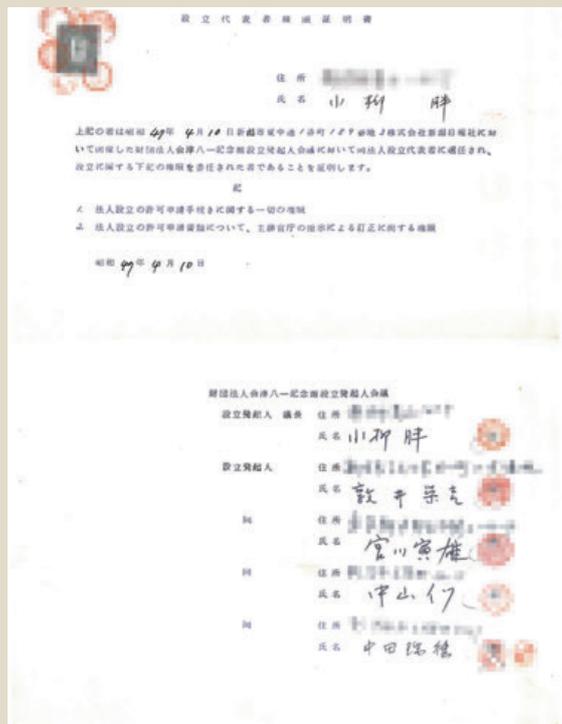
昭和 47 年
1972

4 月

財団法人會津八一記念館
設立発起人会議開催



1972 年 4 月 10 日
財団設立発起人会議で設立代表人に選出された小柳胖氏



1972 年 11 月 2 日 記念館建設前に開催された財団法人設立記念「會津八一展」(大和新潟店)





1974年7月11日 記念館地鎮祭でくわ入れする小柳胖理事長



1975年3月 完成した記念館

財団の初代理事長に就任した小柳氏は記念館の建設資金工面に苦勞したが、1972（昭和47）年度には財団設立の趣旨に賛同した地元企業24社、新潟をはじめ全国の一般市民231件から2,000万円余りの寄付が集まり、新潟県や新潟市、新潟日報社、新潟放送などの協力も取り付けた。こうして1974年7月11日に着工、翌75年4月1日、新潟市西船見町に地上2階建て、地下1階、延べ床面積417.06㎡の「會津八一記念館」が完成、開館した。初代館長は財団の小柳理事長が兼務することとなった。

入館料は大人150円、その他100円とした。

地

元支援助温かく 西船見町に開館

昭和50年
1975

4月

新潟市西船見町に記念館開館
初代館長に財団理事長の小柳胖氏が就任



1975年3月30日 開館を控え、準備に追われる関係者

開館当日

開館当日に行われた開館式には、君健男新潟県知事、渡辺浩太郎新潟市長のほか、財団設立発起人で理事の中田瑞穂氏、宮川寅雄氏、中山イツ氏が出席した。小柳胖理事長は当日付新潟日報朝刊の全面広告で、「秋艸道人會津八一の学と歌と書とを愛する多くの人たちのお力と励ましにすがって、ようやく新潟市の佐渡を望む松林の一隅に會津八一記念館が建ちました。遺書、遺墨、遺品をはじめ関係出版物を収蔵展示し、また研究のための小講演などを行うこととなりました」と述べている。また開館前日の3月31日からは同紙で、戦争末期に疎開先として頼った北蒲原郡中条町(現胎内市)の丹呉協平さんら、八一ゆかりの方々を紹介する「會津八一と私」の6回連載が始まり、4月25日には記念館所蔵作品を紹介する2ページの写真特集も掲載され、開館を大きくアピールした。そして9月には博物館法に基づく博物館原簿に登録された。

初代理事長兼館長の小柳氏が記念館について述べた文献はほとんど残っていないが、1977(昭和52)年の會津八一記念館の館報創刊号には、「あらたに會津八一を知らせる努力が今までになく積極的に、広く行われなくてはならん」と自らに言い聞かせるように語っている。また開館20年となる95(平成7)年の秋艸会報には初代事務局長を努めた治雅樹氏の「開館当初の思い出」が掲載され、小柳理事長が「會津八一記念館をつくったことは、いいことをしたと思う」といかにも満足げで穏やかな、これまで見たこともないような笑顔だったとある。また「記念館は大道無門だ」とも述べたという。禅語を引用したもので、「記念館は何人にも、なんの制約もなしに開かれているのだ」と治事務局長が理解した通り、八一の業績を広く顕彰する記念館の理念そのものが小柳理事長の信念として深く刻まれていた証といえる。



1975年4月1日 會津八一記念館開館式

財団の運営軌道に

4月1日開館(一般公開は2日からです)

財団法人 會津八一記念館 完成

開館にあたって

秋艸道人會津八一の学と歌と書とを愛する多くの人たちのお力と励ましにすがって、ようやく新潟市の佐渡を望む松林の一隅に會津八一記念館が建ちました。遺書、遺墨、遺品をはじめ関係出版物を収蔵展示し、また研究のための小講演などを行うこととなりました。そして9月には博物館法に基づく博物館原簿に登録された。

財団法人 會津八一記念館 理事長 小柳 胖

秋艸道人會津八一の学と歌と書とを愛する多くの人たちのお力と励ましにすがって、ようやく新潟市の佐渡を望む松林の一隅に會津八一記念館が建ちました。

遺書、遺墨、遺品をはじめ関係出版物を収蔵展示し、また研究のための小講演などを行うこととなりました。ご利用願います。

道人逝つて二十年。ご報告かたがた満腔の感謝の意をお伝えいたします。

なお財団法人維持のため、今後とも皆さまのご芳情にお頼りしなければなりません。ご支援のほどをお願いいたします。

天下の會津八一館長

館長 小柳 胖

館址 新潟市佐渡区松林一丁目二番地

電話 025-222-1111

開館時間 午前9時～午後5時(入館料無料)

休館日 月曜日、祭日、年末年始

お問い合わせ 025-222-1111

〒951-8501 新潟市佐渡区松林一丁目二番地

開館にあたって

財団法人 會津八一記念館 理事長 小柳 胖

秋艸道人會津八一の学と歌と書とを愛する多くの人たちのお力と励ましにすがって、ようやく新潟市の佐渡を望む松林の一隅に會津八一記念館が建ちました。

遺書、遺墨、遺品をはじめ関係出版物を収蔵展示し、また研究のための小講演などを行うこととなりました。ご利用願います。

道人逝つて二十年。ご報告かたがた満腔の感謝の意をお伝えいたします。

なお財団法人維持のため、今後とも皆さまのご芳情にお頼りしなければなりません。ご支援のほどをお願いいたします。

財政基盤

公益性の高い財団法人が運営する記念館のため、当初から多くの収益を見込んでいたわけではないが、初年度の1975(昭和50)年度入館者数は10,803人とまずまずのスタートを切ることができた。その後、少しずつ入館者数は増加し、81年度には2万人に到達し、83年度には年間2万3千人を超えた。この間、法人や個人からの募金、新潟市からの支援などに加え、一般の入館料を78年に150円から200円に、86年には400円に、90(平成2)年には500円へと順次引き上げ、入館料収入の安定確保に努めた。また、記念館で作成した書や短冊などの複製や絵はがきの売り上げは堅調に推移した。88年には養女蘭の実家である中山家から著作権を継承したことによる著作権収入も加わり、貴重な収入源として財団の財政基盤を支えた。なお八一の没後50年が経過した、2006年いっばいで著作権は消滅した。

1975年4月1日付新潟日報に掲載された會津八一記念館開館を伝える全面広告の一部

8月

第1回特別展
「秋艸道人・中田みづほ合作展」



1976（昭和51）年8月3日
第1回特別展「秋艸道人・中田みづほ合作展」開幕

特別展の軌跡

年に一度、外部からの借用作品も交えて開催する特別展は開館翌年の1976（昭和51）年に始まった。會津八一の心友であり、主治医でもあった財団理事の中田瑞穂氏の一周年忌となる8月に「秋艸道人・中田みづほ合作展」を開催、水彩の写生画を趣味としていたみづほの作品を高く評価していた八一が贅を入れた作品を中心に展示した。この年は11月にも、「會津八一没後満20年 諸家所蔵秋艸道人作品特別展」を開き、年2回開催となった。その後、八一の母校早稲田大学や、東京で文化人が寄り集まっていた新宿中村屋などと交換展を開催した。また、奈良で深いつながりを持った寺院や芸術家などを取り上げる特別展も数多く開催してきた。新型コロナウイルス感染症拡大などで中止した年もあったが、2024（令和6）年の「會津八一と大和路 入江泰吉 杉本健吉とともに」までに45回開催し、毎年熱心な来館者でにぎわっている。中でも10（平成22）年に新潟県立近代美術館で開催した「平城遷都1300年記念 奈良の古寺と仏像 會津八一のうたにのせて」では実行委員会を主導し、門外不出ともいわれる中宮寺の国宝「菩薩半跏像」や重要文化財13点の出陳もあり、記念館で同時開催した「會津八一 生涯と業績をたどる」と合わせて13万人を超える記録的な入館者数となった（18、19ページ参照）。また2012年の京都相国寺承天閣美術館との交換展「若冲・応挙の至宝」～京都相国寺と金閣・銀閣名宝展～には新潟市歴史博物館と合わせて3万人を超える入館者を記録した（21ページ参照）。

1981年8月19日

生誕100年を記念し、記念館と新潟三越で開催された會津八一展。
同年1月には長岡市でも開催された。



所蔵品

開館前の1972（昭和47）年までに、養女蘭の死後、八一の遺品の後継者となった中山イツ氏から約60点の作品が、85年には八一の早稲田大学の門下生で財団の理事を務めていた宮川寅雄氏から八一の自用印と所蔵印126顆、400枚を超える肖像写真、草稿類、八一全集編集資料の一部が寄贈され、記念館の所蔵作品の礎となった。

88年には八一の唯一の短歌の弟子といわれる吉野秀雄宛の八一書簡614通が遺族から寄贈された。その後、記念館で購入した作品に加え、寄贈、寄託の申し出も多く、現在の収蔵作品数はおよそ12,000点となっている。

小柳マサ館長就任

1月

初代理事長兼館長 小柳胖氏逝去

5月

第2代館長 小柳マサ氏就任

1986（昭和 61）年初めに初代館長を務めた小柳胖氏が亡くなり、その後を引き継いだ夫人の小柳マサ氏は八一を敬慕する市民団体「秋艸会」を発足させ、館報に代わる機関誌「秋艸」を創刊した。八一の命日には新潟市西堀の菩提寺・瑞光寺で「秋艸道人忌」を初めて営み、89（平成元）年には 33 回忌を機に「ふるさとのふる江のやなぎ」の歌碑を同寺に建立するなど、精力的な顕彰活動を展開した。翌 90 年には、それまで年 2 回程度の作品入れ替えにとどまっていた展示を改め、特別展を含め年 4～5 回、具体的なテーマを設定し、これに沿った展示内容で企画展を構成する手法に変更。前年に採用した学芸員が専門的な知識や技能を発揮し、企画力や創造力を生かした展覧会が実現した。それ以来 35 年、この手法は現在の学芸員まで連綿と受け継がれている。



1986 年 11 月 21 日 第 1 回秋艸道人忌



1989 年 6 月 4 日 33 回忌
八一の菩提寺、西堀瑞光寺で
「ふるさとのふる江のやなぎ」歌碑除幕式

その後も 2002 年の退任までに、95 年の開館 20 周年シンポジウム、96 年から 97 年の没後 40 年記念事業として取り組んだ奈良・唐招提寺での法要、八一唯一の歌の弟子といわれる吉野秀雄との往復書簡集（上下）の出版、99 年には奈良・薬師寺に「するえんの」の歌碑を建立、02 年には「漢字」「かな」「書簡・原稿」の 3 分冊からなる大著、新潟市會津八一記念館所蔵『秋艸道人會津八一墨蹟』を出版するなど、八一の業績を全国に広める活動に邁進した。一方で 2000 年 4 月には、2 年前に開館した早稲田大学會津八一記念博物館との交流協定を締結し、収蔵資料の相互利用や情報交換、共同研究プロジェクトで互いに協力する姉妹館となった。この協定に基づき、2025（令和 7）年の開館 50 周年記念特別展では博物館所蔵品 50 点余りを借用することとなった。



吉野秀雄との往復書簡集（左）と
「秋艸道人會津八一墨蹟」全 3 巻

記念館の支援組織

しゅうそうかい 「秋艸会」と會津八一記念館

秋艸会事務局長 山田 修

會津八一を敬慕する人々が集う「秋艸会」は、會津八一記念館設立を迫るように発足している。2 代目館長に就いた小柳マサさんの八一と、記念館設立を望んでやまなかった養女・蘭さんへの強い思いが後押しした。

開館 2 年後に館報が発行されているが、そのまた 2 年後に八一を敬仰し後世に伝えようと「あきくさの会」が発足している。この会は 1986（昭和 61）年に、小柳マサ館長の下で発出した会員制の任意団体「秋艸会」に引き継がれ、記念館運営と事業へ協力する仕組みも整った。

翌年には会報「秋艸」（B5 判 18 ページ）を創刊。會津八一に関連した「研究発表」「新資料紹介」「随想」「行事参加の感想」など八一を慕う内外の研究者や会員の交差点的な役割を担い、会報は開館 50 年の今年で 60 号を数える。

初期の秋艸会には会員も千人近くおり、会報には八一の訾咳に触れた人たちの寄稿が目立つ。現在は高齢化と世代交代で会員は六百人余。しかし、八一の世界を後世に伝えたい、という強い思いは脈々と受け継がれている。

平成7年
1995

開館20周年

8月
開館20周年シンポジウム



1995年8月27日 開館20周年シンポジウム「人間・会津八一」



1995年9月13日 開館20周年特別展

開館20周年と翌年に没後40年を迎える1995年には、生前の八一を知る人も少なくなったことから、八一を再評価し、現代に生かそうというシンポジウム「人間・会津八一」が開催され、特別展では、八一が東洋美術史の研究、教材資料として収集した膨大な中国の明器、鏡、瓦磚、金石拓本などを展示した。

映画「会津八一の世界 奈良の仏たち」全国放映



1996年4月26日
ロケで新潟を訪れた会津八一役の仲代達矢さん

1996(平成8)年10月13日、NHKハイビジョン映画「会津八一の世界 奈良の仏たち」全国放映。監修は早稲田大学の門人・小林正樹氏、八一役は仲代達矢さんが演じた。新潟市が30分、60分ビデオを150本委託製作、市内中学・高校、文化施設に配布した。

企画展と講演会

既述の通り、1990(平成2)年から、収蔵品を中心とした年間3~4回開催する企画展がスタートした。書家、歌人、東洋美術史学者など多方面で活躍した八一の学芸を多角的に分析、時宜を得たテーマを設定し、それに合わせた選りすぐりの作品を展示するようになった。また企画展の作品をより深く理解してもらうための文芸講演会も展示会ごとに開催。研究者、芸術家、文芸評論家、奈良の高僧など各界の一線で活躍している方々を招き、新潟ではなかなか聞くことのできない専門的な知見を分かりやすく伝える機会を提供している。

2024(令和6)年度までに企画展は120回余り、文芸講演会は180回を超えている。

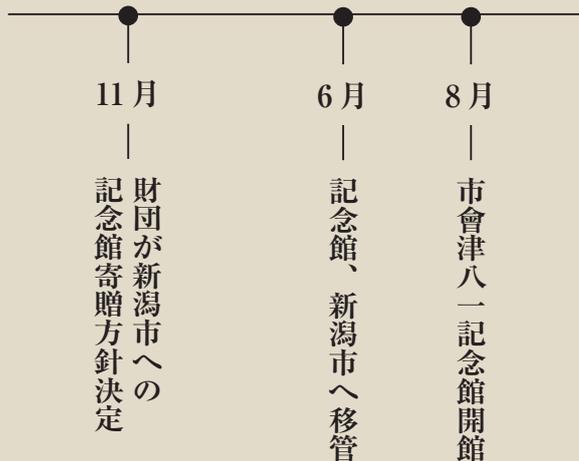
唐招提寺で40年忌法要



没後40年の命日にあたる1996年11月21日、奈良をこよなく愛した八一の40年忌法要が唐招提寺で営まれた。

新潟市へ寄贈 建物と全収蔵品

平成 9 年 1997 平成 10 年 1998



1997年12月3日付 新潟日報掲載

1997（平成9）年11月末、財団は前年の八一没後40年記念事業を契機に八一とその業績への評価、関心が高まり、記念館を市民全体の共有財産として、より広く顕彰、普及してもらうことがふさわしいと判断し、記念館の建物および3,000点に及ぶ収蔵品のすべてを新潟市に寄贈する方針を固めた。

新潟市も「市にとっても非常に意義ある提案」と前向きにとらえ、翌年3月の市議会で寄贈受け入れを可決。6月には記念館が新潟市に移管され、八一の誕生日8月1日に「新潟市會津八一記念館」として新たなスタートを切った。



1998年6月1日
記念館の寄贈目録を新潟市へ渡す小柳マサ館長(右)

長谷川元市長回顧

「會津八一記念館開館50周年に寄せて」

元新潟市長 長谷川 義明

會津八一記念館は、新潟日報社を中心とする後援者の皆さんによって設立された財団法人が建設した施設でしたが、新潟市へ移管される前年の1997（平成9）年、当時の小柳マサ館長から市に寄贈したいというお話をいただき、即座に賛同した覚えがあります。

會津先生は1951（昭和26）年に初の新潟市名誉市民に推挙され、多くの市民から尊敬の念をもって迎えられました。当時私はまだ高校生で、現在の日本銀行新潟支店の場所にあった県立図書館に毎日のように立ち寄り、勉強をしながら帰宅することを日課にしておりました。先生も時々調べ物などでお見えになり、声をかけていただいたこともありました。ご高齢にも関わらず真摯に学んでおられるお姿に深く感銘を受けたものです。

当時の村田三郎新潟市長は會津先生から、市長が心がけるべき要諦として「聴無聲」の扁額をいただいております。先生は「長たるものは住民の声なき声を聴く心構えでなければならない」という思いをこめて贈られたのでしょうか。ちょうどそのころ、私の担任が漢文の渡辺秀英先生で、會津先生と親しくしておられたこともあって、この言葉の出典や解説をいただいたことがありました。1989（平成元）年にできた新潟市の新庁舎の市長室にも「聴無聲」の文字を壁面一杯に大きく拡大したものが掲げられていました。歴代市長の市政の指針となっていたわけですね。

2019（令和元）年9月、天皇皇后両陛下ご来港の折に、記念館をご訪問下され、丁寧に展示をご覧いただいたことは大変光栄なことでした。お二人は會津先生が召人として1953（昭和28）年の歌会始（お題 船出）に参加しておられたことも、十分ご承知だったのでしょうか。

その際の會津先生の献上歌

ふなびとは はやこぎいでよ ふきあれし よひのなごりの なほたか久止母の歌碑は現在、會津先生の母校・県立新潟高等学校前庭に建てられています。

會津八一記念館が、新潟市民にとって誇りに思える展示施設として評価をいただいていることを大変うれしく思うとともに、関係各位の日頃のたゆまぬご努力に対して深く敬意を表します。



1998年8月1日
新潟市會津八一記念館開場式テープカット

早稲田大学

會津八一記念博物館と

交流協定締結

2000（平成12）年4月18日、記念館は1998年に開館した早稲田大学會津八一記念博物館との交流協定を締結した。これにより、名実ともに姉妹館の関係が明確になり、収蔵資料の相互利用、収集情報の相互交換、共同プロジェクトの実施が可能となった。小柳マサ館長は「幅広い研究ができ、會津先生の業績、思想を全国に向かって広げていけると思う」と述べた。



2000年4月18日 早稲田大学會津八一記念博物館との交流協定締結



2000年度に八一の代表作「李白詩」12幅を購入



2001年8月1日 生誕120年記念八一祭特別茶会

神林恒道館長就任

平成14年

2002

6月

第3代館長

久保尋二氏就任

平成16年

2004

4月

第4代館長

神林恒道氏就任

小柳マサ館長が退任した後、第3代久保尋二館長を経て、2004（平成16）年には新潟市出身の大阪大学名誉教授・神林恒道氏が第4代館長に就任した。10年には長岡市の県立近代美術館で「平城遷都1300年記念 奈良の古寺と仏像 會津八一のうたにのせて」の開催にこぎつけ、奈良中宮寺ご本尊の国宝「菩薩半跏像」を一目見ようと13万人もの入場者を動員する空前の大イベントに導いた。（18、19 ページ参照）これが縁となって京都仏教会の有馬頼底師に出会い、12年には師が館長を務める京都相国寺承天閣美術館との交換展を申し入れ、新潟展では「若冲・応挙の至宝 京都相国寺と金閣・銀閣 名宝展」、京都展「最後の文人 會津八一の世界」に結実させた。（21 ページ参照）以来、京都とのつながりが生まれ、18年には東寺（教王護国寺）に京都初の八一歌碑「たちいれば」を建立する契機ともなった。また15年には「東アジア文化都市2015新潟市」の一環で「東アジアにおける<書的美学>の伝統と変容」をテーマに日本、中国、韓国に加え、台湾、アメリカ、ドイツ、フランスの学者による国際シンポジウムを開催。これによって、良寛から八一につながる「書王国・新潟」の伝統を国際的に発信した。（23 ページ参照）

神林館長はこうした大掛かりなイベントをプロデュースする一方で、当館の文芸講演会はもとより、在任中各所で講演会を数えきれないほど開催し、地道な顕彰活動に力を注いだ。

平成 18 年
2006

八一没後50年5大事業展開

八一没後50年 5大事業展開

八一の没後 50 年にあたる 2006（平成 18）年度、記念館では 5 大事業と銘打ち、①学術懸賞論文の全国公募表彰式と開館 30 周年式典開催②入門書「會津八一 悠久の五十首」刊行③「俳優 仲代達矢 座談の夕べ」④八一祭「邦楽と狂言の夕べ」⑤記念切手の発行などを展開した。また年度末には秋艸会と協力して、奈良・興福寺に「はるきぬと」歌碑を建立した。

地方自治法の改正に伴い、新潟市が公の施設運営を民間業者に委託し、市民のニーズに効率的に応える指定管理者制度を 06 年度から導入したため、記念館も選定委員会の審査を受け、08 年度までの 3 年間の指定管理者となった。その後は 5 年ごとに審査を受け、直近では 24（令和 6）年度から 28 年度までの指定管理者に選定されている。一方で、10 年の公益法人認定法施行に伴い、財団は不特定多数の利益に寄与する公益財団法人へと移行した。



2006 年 6 月 30 日 没後 50 年「俳優 仲代達矢座談の夕べ」



2006 年 10 月 5 日
興福寺仏頭のレプリカなどを展示した會津八一没後 50 年記念特別展
「會津八一と奈良～いにしへの都のかおり～」内覧会

学術懸賞論文

全国公募

2006（平成 18）年の八一没後 50 年記念事業では、全国の若い書の研究者や作家を対象とした「會津八一賞 学術懸賞論文」を全国公募した。テーマは『書の美学「かな書と歌』。書と文学の交感をテーマに書論及び書の美学の分野で自由な研究活動を奨励し、合わせて會津八一の業績を若い視点で再認識してもらう目的で実施した。最高賞の「會津八一賞」には八一と北大路魯山人の書を比較、論究した高校教諭の角田勝久氏の「秋艸道人・會津八一の『かな書』と歌について」が選ばれた。



2006 年 11 月 20 日 「會津八一記念館 学術懸賞論文」
會津八一賞の角田勝久さん

国宝・中宮寺菩薩半跏像

重要文化財13点出陳

13万人が来場

「奈良の古寺と仏像―會津八一のうたにのせて―」

2010(平成22)年は平城遷都1300年にあたり、奈良・中宮寺の国宝「菩薩半跏像」をはじめ重要文化財13点を含む43点が出陳された「奈良の古寺と仏像 會津八一のうたにのせて」を新潟県立近代美術館で開催した。当初は記念館と新潟市美術館で展示する予定だったが、市美術館の展示室で展示環境に不備があったことから、開幕1カ月ほど前に会場を急ぎよ、長岡市の県立近代美術館に変更して開催する異例の事態となった。

菩薩半跏像は東京と奈良以外には門外不出だったが、中宮寺の日野西光尊門跡から04年の中越地震と07年の中越沖地震による震災後遺症に苦しんでいる県民への慰めと励ましになればという格別の配慮をいただき、新潟への出陳が実現した。ご本尊のほほ笑みは見る者を魅了し、やすらぎを与えた。このほか、県立近代美術館には法隆寺の観世音菩薩立像、東大寺の弥勒菩薩立像、薬師寺の十一面観音菩薩立像なども展示され、八一がこよなく愛し、歌に詠んだ奈良の仏教美術の粋を堪能いただいた。新潟では見ることでできない仏像群に県民の関心は非常に高く、記念館で開催した「奈良を酷愛した偉大な文人の軌跡《會津八一》『生涯と業績をたどる』」と合わせた入場者は13万人を超える記録的な展示となった。開館35周年を迎えた記念館も実行委員会が主導的な役割を務め、展示会の成功に大きく貢献したことが評価され、新潟日報文化賞を受賞した。



2010年4月24日 「奈良の古寺と仏像」テープカット



2010年4月25日 仏像と會津八一への思いを語り合うシンポ「こころの時代」



2010年4月25日 満席の「奈良の古寺と仏像」シンポ



新潟日報文化賞の表彰状



2010年5月25日 多くの市民が詰めかけた国宝菩薩半跏像公開初日

開幕当日にはこの展覧会の開催趣旨に沿い、長岡市山古志で国宝「半跏菩薩像」を出陳した中宮寺の日野西光専門跡や東大寺の上野道善別当など8人の僧侶が訪れ、中越地震、中越沖地震の犠牲者の冥福を祈り、被災地の復興を祈願した。また翌日の「開催記念シンポジウム『こころの時代』」にはそれぞれ重要文化財を出陳した東大寺の上野別当、法隆寺の大野玄妙管長、薬師寺の山田法胤管主が出席、仏像や會津八一への思いを語り合った。中宮寺の日野西門跡は長岡、佐渡でも講演を行い、新潟では就任間もない東大寺の北河原公敬別当との対談にも出席した。そのほか、會津八一の生涯を通してまちづくりを考えるトークイベント「會津八一のまなざし～奈良、そしてふるさと新潟」も開催された。記念館でもこの展覧会に合わせ、外国人向けに八一が奈良をどう評価したかを知ってもらい、日本文化を理解するきっかけになればと英文の「The Life and Works of Aizu Yaichi」を制作した。



多くの来場者であふれる「奈良の古寺と仏像」会場



2010年5月29日 中宮寺・日野西光専門跡と神林館長の対談



2010年4月24日 「奈良の古寺と仏像」開幕日に長岡市山古志で営まれた中越地震、中越沖地震の犠牲者の冥福と復興を祈る法要



2010年6月3日 中宮寺・日野西光専門跡と東大寺・北河原公敬別当の対談



2010年11月29日 中宮寺に「みほとけの」歌碑建立

平成 24 年
2012

平成 25 年
2013

2月

新潟市と奈良県が
歴史・文化交流協定締結

4月

第2代館長小柳マサ氏が
名誉館長就任

3月

新潟市と京都市が
観光文化交流宣言に調印

八一の功績が縁で

新潟市と奈良県が

歴史・文化交流協定締結

會津八一は早稲田大学卒業後、新潟県中頸城郡板倉村の有恒学舎（現 県立有恒高等学校）に勤務していたころに初めて奈良を訪れた。それ以来奈良の風光と美術をこよなく愛し、たびたび訪ねては数多くの歌を詠み、自ら揮毫した。これをもとに、奈良県内の寺社などに 20 基もの歌碑が建立された。奈良の人々にも受け入れられた八一の歌が大きなきっかけとなり、2012（平成24）年には新潟市と奈良県が歴史・文化交流協定を締結することになった。



2012年2月17日
新潟市と奈良県が
歴史・文化交流協定締結



2012年9月9日
法隆寺門前のiセンターに「うまやどの」歌碑除幕式



2014年11月7日 念願だった法隆寺五重塔近くに八一の「ちとせあまり」歌碑建立



2012年4月23日 小柳マサ第2代館長が名誉館長に



2014年5月25日 西船見町記念館最終日

新たな船出

1998（平成10）年に新潟市に寄贈され、市の施設となった西船見町の會津八一記念館は、建設から40年近くが経過したため、市は建て替えか移転を検討した結果、中央区万代のメディアシップに入居する、本県出身の文化人の業績を後世に伝える「にいがた文化の記憶館」と同じフロアに移転することを決めた。互いに新潟の文化を発信できる相乗効果や、交通の利便性が高く、来館者増にも期待できるとして、2014年8月1日に開館した。西船見町記念館は最後の春季企画展「ありがとう39年～収蔵品で綴る物語～」で約40年の歴史に幕を閉じた。メディアシップ開館前日の7月31日には記念館の館碑移設除幕式、落慶法要、祝賀会を開催。落慶法要には奈良の東大寺、興福寺、唐招提寺、薬師寺、法隆寺、中宮寺、京都仏教会、大徳寺松源院、地元新潟県仏教会から大僧正ら13師が勢ぞろいし、記念館の発展を祈願した。開館当日は特別展「會津八一の奈良～歌集『鹿鳴集』の世界～」の開場式と文芸講演会を開催。神林恒道館長は「特別展では八一が奈良に寄せた深い思いを多くの人に知ってほしい」と述べ、詰めかけた多くの市民とともに新たな船出を祝った。

平成26年
2014

交

通

至

便

誘

客

に

期

待

メディアシップへ移転



2014年7月31日
會津八一記念館館碑移設除幕式



2014年7月31日
記念館移転落慶法要 奈良、京都の高僧一堂に



2014年8月1日
東大寺森本公誠長老による
メディアシップ移転後初の講演会

8月
新潟日報メディアシップへ移転、開館



2014年8月1日
メディアシップ移転とともに行われた特別展「会津八一の奈良」開場式



賑わった移転後初の内覧会

東アジア国際シンポジウム

東西の知見が交錯

文化庁が主導する日本、中国、韓国3カ国の文化交流事業を進める「東アジア文化都市 2015」の日本開催地に新潟市が選定され、その関連イベントとして2015（平成27）年9月に「東アジアにおける〈書の美学〉の伝統と変容」をテーマとした国際シンポジウムが開催された。このシンポには日中韓のほか、台湾トップレベルの研究者に加え、ドイツ、フランス、アメリカの美学の権威が登壇した。初日は「中国書法の伝統の形成」、2日目は「日本・韓国における書の変容」をテーマとした。このような書の芸術性に関する、東西の専門家の知見が交錯するシンポはかつてない試みとなった。また記念館では中国の三千年にわたる書の歴史を確かめる特別展「書之美ヒストリア 藤井有鄰館所蔵名品でつづる」を開催、有鄰館のご厚意で古代の金石文、王羲之の時代から宋、元、明、清の大家の墨蹟が並び、中国書道史を俯瞰できた。



2015年7月31日
「東アジア〈書の美学〉企画展覧会 書之美ヒストリア」開場式

平成27年
2015

9月
— 東アジア国際シンポジウム



東アジア交換シンポジウム

メディアシップ移転

「よきふみつづれ」メディアシップ
ハ一の歌碑除幕

新潟市出身の歌人で書家の会津八一の歌碑が新潟市中央区の新潟日報メディアシップ前に設置され、31日、除幕式が行われた。

歌碑は新潟日報社が建立し「わがともよよよきふみつづれ ふるさとのみすたのあせに よむひとのため」と刻まれている。1946年5

夕刊創刊の誓い
未来の紙面にも



会津八一の歌碑の除幕式でありさつずる左野勝司さん(31日、新潟市中央区の新潟日報メディアシップ

月に創刊した「夕刊ニヒカタ」新潟日報夕刊の前身)の社長に就任した八一が、社員に公正で分かりやすい報道をしてほしいという思いを込め、創刊紙面に掲載した。

碑は高さ約1.4m、幅約1.4mで、香川県産の麻治石を使用。カンボジアのアングル遺跡群などの石造文化財修復に尽力している石工、左野勝司さん(74)奈良市に寄贈した。

除幕式には左野さんも新潟日報社的小田敏三社長ら約30人が出席した。小田社長は「新潟日報の戦後の再出発、報道の精神として語り継がれ、わが社の礎となっている言葉。県民の皆さんにも見てもらいたい」と話した。

また、左野さんは同日、いがた文化の記憶館に対し、50万円を寄付した。

2016年11月1日付 新潟日報掲載



2018年3月27日
東寺に京都初めての「たちいれば」歌碑建立

平成 28 年 2016
令和 元年 2019
令和 2 年 2020

10月

「わがともよ」歌碑
新潟日報メディアシップに建立

8月

八一祭でトークイベント
「すがすがしさと優しさ」
八一の書と人を語る」開催

4月

第5代館長野中浩俊氏就任

4月

新型コロナウイルス感染症拡大、
新潟県の緊急事態宣言発令により
4月21日(5月11日)休館

トークイベント

2019(令和元)年の八一祭では、書家で俳優の松村雄基さんと八一研究者の角田勝久新潟大学准教授のトークイベントを開催した。松村さんは中央の展覧会で総理大臣賞を受賞するほどの腕前。前年、ミュージカル出演のため新潟を訪れ、街を散策していた折、偶然立ち寄った記念館で、角田准教授に出会い、2人は意気投合し、翌年のトークイベントへとつながった。松村さんは書の師匠から八一の素晴らしさを伝え聞き、自分でも研究する熱心な八一ファンでもある。席上揮毫、八一書簡の朗読、詩吟などにも応じていただき、喝さいを浴びた。こうした活動がファンの間でも広まり、毎回全国から多くの来場者が訪れるほか、地元からの誘客にもつながっている。コロナ禍で1回中止したが、25年10月の開催で6回目となる。



2019年8月1日
俳優・松村雄基さんと
角田勝久新潟大学准教授による
第1回トークイベント



2024年10月19日
恒例となった席上揮毫

コロナ禍

2019(令和元)年に発生した新型コロナウイルス感染症は20年には日本でも広がり、緊急事態宣言も発令された。記念館も4~5月に20日間ほど休館を余儀なくされた。その後も特別展を企画展に変更したり、講演会、八一祭を中止するなど、当初の予定を大幅に組み替える結果となった。展覧会は例年通り、年4回開催を維持したが、外出を控える気運が高まり、年間の入館者数は19年度の7466人から3453人へと激減した。その後も長引く警戒体制のもと、23年5月に「5類感染症」に移行するまで入館者数はなかなか回復せず、ようやく23年度に19年度と同等の7000人台まで戻すことができた。



2020年11月
コロナ禍で講演会も間隔を空けて開催

令和3年
2021

令和5年
2023

2月
|
記念館のシンボルマークを決定

7月
|
第一作品を忠実に刻んだ石版寄贈受け
第一回「高校生拓本大会」開催

シンボルマーク公募

2020（令和2）年には開館45年を記念する特別展を予定していたが、コロナ禍で中止となったため、代わりに記念館のシンボルマークを全国公募した。小学生から80代までの486人から692点の応募があり、応募まではしなかった人たちのすそ野を考えれば関心を集めることができたといえる。21年2月の審査の結果、最優秀作品はアートディレクターの明星秀隆さんが制作した、八一と親交のあった写真家・濱谷浩氏撮影の肖像画のシルエットと「八一」の自署をモチーフとした作品に決定した。審査委員長を務めた写真家の浅井慎平さんは「會津八一の存在は鮮烈であり、そのシンボルは會津の立ち姿であろう。このシルエットはこれまで會津を愛してきた多くの人々の心に刻まれており、そしてこれからの新しい時代にも語り継がれていくものだとも信じる」と評価した。

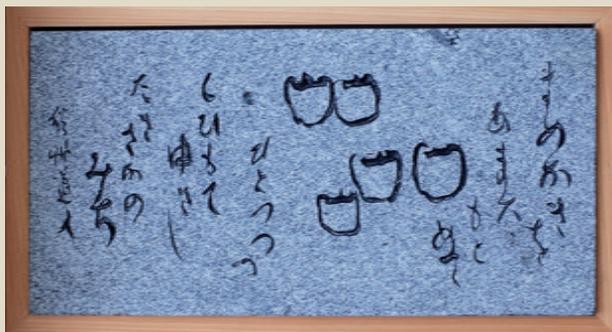


AIZU YAICHI
MEMORIAL MUSEUM

最優秀賞に選ばれたシンボルマーク

石版寄贈と高校生拓本大会

2022（令和4）年に八一の揮毫した歌を忠実に彫りこんだ石版9枚が世界的な石工・左野勝司氏から新潟日報社に寄贈されたことから、翌年7月に新潟市内外の高校書道部に呼びかけ「高校生拓本大会」を開催した。採拓は初めてという学生が多く、関心も高かった。若い世代にじっくり八一作品に向き合う機会を提供できたことで、今後も継続的に開催する予定。



石工・左野勝司さんから新潟日報社へ贈られた石版（まめがきを）



石版（聴無聲）



石版（獨往）



2023年7月30日
多くの書道部員が参加した第1回高校生拓本大会



2023年7月30日
石版に敷いた紙の上から丁寧に墨を塗る高校生



2024年7月31日
出来栄をを発表する参加者



Imperial Family

皇室の皆様もご来館



會津八一が1953(昭和28)年の新年^{めしうど}宮中歌会始の儀に召人として参列し、
「ふなびとは はやこぎいでよ ふきあれし よひのなごりの な^{くとも}はたか久止母」
と詠んだこともご縁なのか、記念館には皇室の皆様も足を運んでくださっている。

■天皇皇后両陛下ご来館

天皇皇后両陛下は2019(令和元)年9月16日、「第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会」開会式ご出席のため来県され、翌日17日に新潟市會津八一記念館を訪問された。記念館では昭和天皇が1947(昭和22)年10月に来県された折に八一が詠んだ『みちへの をぐさのつゆに たちぬれて わがおほきみを まちたてまつる』などの「奉迎歌」や母校の小学校へ寄贈した『涵之如海』(之を^{ひた}涵すこと海の如くす)などをご覧になった。また彫刻家の奥田勝に宛てた15メートルにも及ぶ厳しい“お説教状”にも関心を寄せられ、「とても長いですね」とご感想を述べられた。



2019年9月17日 両陛下ご来館 (提供:新潟県)

■秋篠宮妃紀子さまも

1993(平成5)年5月、秋篠宮さまと新潟県を訪れていた紀子さまも記念館を訪問された。小柳マサ館長が長女眞子さまのお印モッコウバラでお出迎えすると嬉しそうにされ、秋篠宮家ゆかりの奈良県秋篠寺で八一が詠んだ「あきしのの みてらをいでて かへりみる いこまがたけに ひはおちむとす」の歌には「うれしいことです」とほほ笑まれた。

紀子さまご来館前にも1986(昭和61)年6月に高松宮さまが、その後2010(平成22)年9月には、高円宮妃久子さまも記念館を訪れている。



1993年5月27日 秋篠宮妃紀子さまご来館



2010年9月26日 高円宮妃久子さまご来館



第1回写真コンテストポスター



第1回秋艸道人賞写真コンテスト審査風景



入賞・入選作品選定に厳しい視線を送る
写真コンテスト審査員



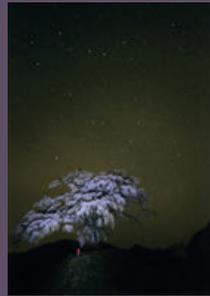
数多くの作品が出品される 写真コンテスト



記念館での入賞・入選作品展示



薬師寺東塔の水煙を題材に
前文化庁長官の官田亮平氏が制作した
秋艸道人賞トロフィー



秋艸道人賞 写真コンテスト

Photo
Contest

全国に数多くいる写真愛好家にも、八一とその歌に関心をもってもらおうと、2007年（平成19）年から全国公募の「會津八一の歌を映す 秋艸道人賞写真コンテスト」を開催した。審査委員長には写真家の浅井慎平氏を迎え、歌と写真の専門家も審査に加わった。八一の歌心を写真で映す全国でも稀なコンテストとして定着している。当初は記念館で選定した歌のみを対象としたが、その後、記念館で出版した「會津八一 悠久の五十首」や「秋艸道人會津八一 美の彷徨」などに収められている歌を対象を広げた。八一の歌をただ単に視覚的になぞるのではなく、万人の心に響く心象風景を自在に映像化してもらった。初回の秋艸道人賞には「むさしのの」をテーマにした佐々木剛氏の作品が選ばれた。表彰作品は八一とゆかりの深い奈良と胎内市の巡回展で披露、現在では東京、京都、高松も巡回している。年々認知度も高まり、応募点数も上昇傾向をたどっており、26年には20回の節目を迎える。



京都・三千年で開かれた巡回展

普及活動

會津八一記念館では展覧会の開催以外にも、講演会や解説会、歌碑めぐり、書に関する体験講座など、さまざまな分野で広く顕彰活動を展開している。



2012年5月18日
学芸員による展示解説



2021年8月10日
講演後にも作品解説をする野中浩俊館長



2025年5月22日
初めて展覧会の舞台裏を紹介する学芸員鼎談

講演会・解説会

展覧会に合わせて開催する文芸講演会の歴史は古く、財団の事業報告書によれば、開館翌年の1976（昭和51）年から始まり、2024（令和6）年までに180回以上開催されている。そのほかにも開館当初は記念館内で20人程度の教養講座や文芸懇話会などの講演活動も活発に行われていた。

文芸講演会には当初から大学教授などの研究者をはじめ書家や歌人、奈良や京都の高僧などバラエティに富んだ講師が登場。展覧会のテーマに沿った内容を、わかりやすく解説する中身の濃い講演となっている。受講者は毎回100人前後だが、アンケートでは高い評価を得ている。

また館長による作品鑑賞会を展覧会ごとに1回開催するほか、特別展では毎週、企画展でもほぼ隔週の日曜日に学芸員が作品解説会を行っている。展示された作品の内容はもとより、作品の由来や完成までの背景など、専門的な見地から詳細な説明を行っている。一方、来館できない方にも展示作品を紹介し、理解を深めてもらうため、特別展では100ページほどの製本した図録を、企画展でも簡易図録を作成、有料で送付し、好評を得ている。



2017年2月23日
刻字体験講座



2025年3月8日
真剣に石に文字を刻む篆刻講座

体験講座

開館以来、展覧会やイベントの関連事業として不定期で開講してきたが、直近では2024年度に「書の体験講座」と銘打ち、絵手紙、年賀状、篆刻の講座を開催した。参加者が自分の好みに合わせた作品を制作できるよう心がけた。各講座とも40人前後に参加者を絞り、講師の目が全員に届くよう配慮し、直接指導してもらった。終了前には、講評会を行い、ほかの参加者の出来栄を参考にできたことも評価される要因となった。

歌碑めぐり

歌碑めぐりも随時開催してきたが、2022年度からは3年続けて実施している。新潟市内の徒歩圏内にある八一の歌碑や揮毫碑などへ、館長や学芸員が同行し、解説しながら巡る。訪問する歌碑は限られるが、八一唯一の歌の弟子といわれる吉野秀雄歌碑や高浜虚子の句碑なども加え、バリエーションを広げている。



2009年7月25日
西船見町の「みゆきつむ」歌碑



2025年3月22日
古町通りの「平家物語」揮毫碑

出版物 & グッズ

Publications



八一関連書籍群



八一書簡集「雁魚来往」既刊全10巻



毎年特別展に合わせて発行する図録

Goods



オリジナル便箋、クリアファイル、エコバッグ、切手など



記念館特製 八一の書入りTシャツ



記念館オリジナル「学規」鉛筆、ハガキ、一筆箋

會津八一記念館50年の歩み

2025(令和7)年8月発行

編集・監修／公益財団法人 會津八一記念館
〒950-0088 新潟市中央区万代3丁目1番1号
新潟日報メディアシップ5階
TEL：025-282-7612
FAX：025-282-7614
E-mail：info@aizuyaichi.or.jp
HP：https://aizuyaichi.or.jp

発行／公益財団法人 會津八一記念館
デザイン・印刷／株式会社ウイザップ

本誌掲載の素材収集には新潟日報社の全面的な協力をいただいた。
ここに厚くお礼を申し上げます。



AIZU YAICHI
MEMORIAL MUSEUM